

## 恩師 高松亨先生追想文

中 田 将

私と高松先生との初めての出会いは、私が「産業技術論」を履修した時だったと思います。根っからの文系であった私は、経営情報学部でありながら得意の情報科目以外ではできるだけ文系寄りの科目を探しては履修申請をしていました。産業技術論を履修したのも、産業技術について歴史を紐解きながら……というシラバスに興味を持ったからだと記憶しています。

初回の講義の際、「これはまた、大学教授らしい教授がでてきたなぁ」と強く感じたことを今でも鮮明に覚えています。痩せ型でヒョロリとした立ち姿、無造作な髪の毛、蓄えられた髭、飄々とした語り口と立ち振舞……。まさに、私の中のステレオタイプな大学教授像そのものでした。そして、産業技術論の講義を受講するたびに高松先生の講義をもっと受けたいと思い、高松先生の講義を見つけては積極的に履修申請をしていきました。

その後、ゼミ選択の時も高松ゼミへと申請を出しました。高松ゼミは、学生の間でも人気があり、申請者が多く、面接試験が設けられていました。学生間では、教授の金で酒が飲めるゼミであるとか、単位を貰いやすい、など不純な動機を誘うような噂もあり、申請者数が増加していたのではないかと思います。もちろん真面目な私の志望理由は、飲み会たくさんあるのはいいなぁという期待以外に不純な動機はなく、高松先生のゼミだからと言うのが大きな理由であったことは言うまでもありません。面接では何を話したかあまり覚えていないのですが、当時実家の三重県名張市から電車通学していた事を掘り下げられ、名張市と伊賀市の学生は皆通学を選択する。それは大阪のベッドタウンに住んでいることへのある種のプライドのためだ……。というような話をされたことだけは覚えています。当時の私にはそのような思いは全く無く、新たな視点を提示されたことに衝撃を受けました。様々な知識や視点をお持ちだったことも高松先生の魅力だったのかもしれない。今思い返すと、いつも高松先生の視点に感心する事しきりでした。

そんな高松先生も大好きなお酒が入ると普段の少し固い部分がほぐれるようで、空手道部顧問であった時期でもあまり人前では見せなかったという道着姿を披露してくれたり、私たちにアドバイスをする過程で、ご自身の過去の失敗などを自嘲気味に話してくれたりという人間味のある一面もありました。そんな先生だからこそ私を含めた学生たちは心を開いて接することができたのだと思います。このような人間的魅力が、高松邸に現役生のみならずOB・OGまでが多く集まるという事態を引き起こしていた一因だったのではないかなと感じています。もちろん、私自身も高松邸によくお邪魔していた一人です。また、高松邸にお邪魔するとなるといつも期待していたものに高松先生が腕をふるった料理

がありました。パスタや鍋料理等とても美味しいものばかりでした。毎回あるわけではないので、高松邸までの道中は今日は先生の手料理出て来るかなぁ、と期待しながらの道中でした。ご自分では、酒のつまみを自分で作るためだけの料理力だとおっしゃっていましたが、かなりこだわって腕を磨かれていたようでつまみだけというレベルではなかったことを付け加えておきます。

卒業後、高松先生にお会いするのは、ゼミの先輩から誘われる忘年会や、ホームカミングデーでお会いするだけでしたが、高松ゼミ生としてそれらに参加することは私の大学生としての4年間が残した数少ない財産の一つでした。そんな折、ゼミの先輩から高松先生が倒れられたと伝え聞き、とても心配をしていましたが、詳しい状況もわからず御見舞にも行けないまま時間が過ぎてしまいました。しかし、そのうちに手術を終え、退院されたと聞き安堵しました。その後、お会いした先生はもともと痩せ型でしたが、一回りも二回りも小さくなられたように感じました。結果的に最後となってしまったホームカミングデーの招待状にも「今回は最後かもしれない……」などの見出しが踊っていましたが、実際に壇上で話されている姿を見ると、まだまだお元気でいてくれるような気がしていました。ただ、その後お会いするたびに、いままでよりもずいぶん早く休まれるようになり、心の何処かでは良くない想像をすることも有りました。それでも、以前と変わらず飄々と振る舞い、酒を飲み、煙草を燻らす姿を見ていると、まだまだお元気そうだと感じました。しかしその後、ゼミの先輩から電話が着信した時、電話を取る前からついにその時が来てしまったような予感がしていました。

伊賀市の勤務先から車を飛ばし、JRに乗って京都駅近くの葬儀会場へ。現役ゼミ生やOB・OGの方と挨拶をし、記帳を済ませて、席に付き、式の始まりを待っているときでさえ全く、自分が恩師の葬儀に居るという実感が湧いていませんでした。それは、今この追想文を書いている現在でもそうです。最初は、いまだ近親者の死に目にあっていない自分が、恩師の死を受け入れられていないからだと思っていましたが、いまは高松先生の思いや教えが今も自分の中にあるから、高松先生がこの世にいないように感じないだけだと思うようになりました。

高松先生はご自身に子がいないことについて、「ゼミ生が子供みたいなものだ」とおっしゃっていたことが有りました。私も、高松ゼミと高松亨の「子」として高松先生の教えを胸に、生きていこうと思っています。高松先生、本当にありがたうございました。